

## 『書の現代性』(一)

「書の現代性」ということは、今みなさんが大変関心を持っておられるところでしょう。現代的な書をお書きなさいとか、現代性がなにか、よく常識的にいいますが、じゃ「現代性」とは何なのかといったら「現代性」の定義というものが、実際にはなかなか掴めないのじゃないですかね。簡単に掴めそうに思いますが、存外に現代性という言葉は曖昧だと思ふ。なぜかといえば、屁理屈のようですが「今」というものは刻々過ぎ去って行きますでしょう。過ぎ去ったものは、明日からでも現代ではないみたいなのです。今ここに「あるもの」という意味が「現代性」です。いま、床の間に飾ってある軸を見て、写経の切ですがあれは隋に間違いない。今日で一眼見て隋だと判るので、おそろく隋の時代には隋の現代性を示していたものだったろう。その「現代性」というものですが、それは隋の時代の現代性、平安朝時代の現代性というようなものだったに違いない。その時代に現代性だったというものは何かということですが——それはそのころの傾向ということになる。だから、ここで現代性ものといえは、何か選択されたごくわずかなものであるかのように思ふかも知れないけれど、現代人に今最も受けているもの、つまりいちばん人気があるもの。流行るところまでいかなくても流行りそうな、少なくともこれからの人气的になるようなものがいわゆる「現代性」で、その中でもその新鮮な感じが、やがてホープのひとつになるというようものでないかと思う。「現代性」というのは、いわば、その時分の旧套を脱いだ最大な傾向ということになるかと思う。だからこういうことにもなる。「現代性」も少し時が過ぎるとまた陳腐になってしまう。かつては非常に新しかった筈のものが陳腐になり、埋没してしまうというのが沢山あります。とうとうそれっきり、再びこの世で見ない。ところがそうではなく、今になってみると、たとえば鎌倉時代の書というのは割合に斬新なんです。これらの作品が、こんなに斬新さを持っていたらう

か。たとえば木簡など今から二千年も前のものですが、今の人のとつても素晴らしいものを内蔵している。金冬心などはあの時分の異端です。それは、ごく少数の臍の曲がった連中の間に流行したのです。今は臍が真つ直ぐだつて、あの字が大好きな人は随分あると思う。金冬心に惚れ惚れしているとか、八大山人がどうだとかいつても、それが臍曲がりかといえはそうでもない。あんなものを書き出したら臍曲がりかも知れませんが、あれの愛好者だつたら、かなり書というものを楽しようという目を持っていてるかぎりにおいては、あれは相当珍しいよいものなんです。じゃ金冬心は清朝の間に（明が亡びた時の人ですから）流行したかといえは流行してないんです。どっちかといえは、収蔵家の倉の中で潜んでいたようなものが、このごろになって盛んにもてはやされ、偽物も出てくるということ、今のこの世の中に迎え入れられるべきものの何かがあったのです。そうすると、あの書は、今から四百年前に今日の現代性があつたということもなります。現代性というのは今日性です。現代性といふとちよつと誤りがあるけれども「今日性」があつたわけです。今でもわれわれの生命に訴えてくるものがある。一体それは何なのか。まあそういうと、この話は全部屁理屈です。大変いい話のようですけども、屁理屈で大した話じゃない。「今日性」といっても「現代性」といっても同じですが、それはすぐ過去になつてしまふ。過去になると同時に過去のものはおかしいもので古くさく見えるんですね。じゃ何か日新しいものを——その日新しいものを何によつて見つけるかということ。これが非常に大事なことなんです。たとえば、現代の書家の中で、「現代性」があると見られている人、その人たちの書いているものに対して大変魅力を感じるでしょう。その人は、みんなに魅力を感じさせるようなものを何からこしらえてきたか。よく考えみると、今は書道というものの型が出揃いすぎているんです。（つづく）